

4-4 自然災害の多面性

自然災害は、火災や犯罪などと違うところは、被害となる場所の素因をコントロールできないという点にあります。昔の標語に、マッチ一本火事のもとというのがありました。注意を怠らなければある程度火災を防ぐことができるということだと思います。ところが、自然災害も素因は自然現象で、そのコントロールはできないのは当然ですが、最近の科学的知見では、その素因に我々の人間の活動が深く関係しているというように言われています。その一つは地球温暖化です。いまや地球温暖化現象を疑う人はほとんどいなくなったとは思いますが、この影響が気象変化をもたらしているということです。その辺の雰囲気は、肌感覚でも度重なる豪雨災害、台風の通過や豪雨のパターンが以前とは変わってきているような感じもしています。また、自然災害の対象となる場所の我々の資産のあり方についても大きな変化があります。つまり、国土の利用、国土自体の変化といったことで、地形や地質を無視した開発によるものや地すべりや土石流といった現象が多発期に当たっていると森林環境が悪化して、本来有している場所の土砂流出防止とか地表水浸透能力が低下しているというような状況にもなってきていると思われます。また、今まではあまり顕在化していなかった深層風化という大規模な山体崩壊なども懸念される状況になっていると思います。つまり、今まではかろうじて地表における降雨や土壌といったものがバランスよくなじんでいたものが、そのキーポイントが不全になってしまっているような気がします。例えば、地すべり多発している山麓では、よく田毎の月と称されるような棚田があつて、かつてはそこで地表水がコントロールされていたのですが、その管理が十分でないために地表水が直接流出するようになって、下方の斜面がすべりを起こしているというようなことも起きています。もちろんそれだけではなく、ほかの要因も関係しているとはいえ、その要因の一つになっていることは明らかです。我々の先人は、このような自然の仕組みを巧みに利用して、生産と居住を両立してきていたと思います。その結果として、防災文化が醸成されてきたのだと思います。今、その自衛の文化が断たれようとしているだけでなく、そのようなものが連帯すると大規模な災害になる危険性があります。我が国の国土は狭小ですので、危険なら放棄して移住するというような状況にありません。自然と共生しながら、利活用しなければなりません。費用をかけずに、知恵を出すようにしなければなりません。そうすると今までの先送りの考えでよいのかどうかわかりません。新たな土地利用、国土保全を考え、国民が同じ意識をもって、関心を持ち続ける必要があります。費用をかける余裕がなくなっている現在、ハード対策一点張りでよいのか、住民一体となった対応が必要な気がします。災害があると復旧、復興となりますが、臨時出費であるということで、後々の借金になるということを実感に思うべきです。このことは一人一人の家計に当てはめてみると理解できるのではないのでしょうか。これからは、国土利用の再編という中で、限られた資産を賢く利用して、できるだけの出費を抑えていくようにして、別なところに予算が割り当てられるようにすることをしていくべきです。借金もそうですが、知恵なくして先送りは後世に迷惑になるだけです。